

2020年度 創立者古屋賞・山梨学院スチューデント オブ ザ イヤー賞 受賞者

【創立者古屋賞】

No.	部門	フリガナ 氏名	学科	学年	所属	内 容
1	創立者古屋賞	オトツロ タクト 乙黒 拓斗	法	4	レスリング部	<ul style="list-style-type: none"> ・2020東京オリンピック レスリングフリースタイル65kg級 出場内定 ・2020アジアレスリング選手権大会 フリースタイル65kg級 優勝 ・2019天皇杯全日本選手権大会フリースタイル 65kg級 優勝2連覇 ・2018世界選手権大会 フリースタイル65kg級 優勝(日本最年少記録) ・2018天皇杯全日本選手権大会フリースタイル 65kg級 優勝 天皇杯受賞
2	創立者古屋賞	スズキ ヒナコ 鈴木 日奈子	経	4	サッカー部	<ul style="list-style-type: none"> ・2017 関東大学女子サッカーリーグ2部 優勝 ※1部昇格 ・2019 第30回ユニバーシアード競技大会(ナポリ)日本代表 準優勝 ・2019 関東大学女子サッカーリーグ2部 優勝 ※1部昇格 ・2020 関東大学女子サッカーリーグ1部 5位 ・2020 全日本大学女子サッカー選手権大会 ベスト16 <p>※関東大学女子サッカーリーグ1部に全試合出場 主将としてチームに貢献、創部以来初のインカレ出場権の獲得 *卒業後はAC長野パルセイロ・レディースとプロ契約、将来が期待される</p>

【スチューデント オブ ザ イヤー賞・大学院】

No.	部門	フリガナ 氏名	学科	学年	所属	内 容
1	学術	ホシノ ノブユキ 保科 展之	社	2	太郎良ゼミナール	<p>論文「役員給与に対する適切な課税の在り方 ～残波事件判決を中心として～」は、役員給与の損金不算入を定めた法人税法34条2項の「不相当に高額な部分の金額」の適用について、その解釈はあいまいであり、実務上、納税者は明確に「不相当に高額な部分の金額」を算定できない点を指摘した論文である。具体的な事例として、平成30年1月に下された最高裁判決で示された売上高倍半基準を取り上げ、当該基準の問題点を指摘し、同法の新たな解釈を提案している。</p> <p>筆者は会計事務所に勤務しているため、実務上の問題意識に基づき、論文を構成しまとめている。問題意識も明確であり、結論にも到達しているうえ、筆者ならではの提言も行われている点が評価できる。本論文は実質的、形式的な基準を備えた優秀な修士論文である。</p> <p>また、保科氏は長野県から通学し、社会人として働きながら研究を熱心に行ったことも評価できる。</p> <p>以上の理由により、保科氏を本年度の山梨学院スチューデントオブザイヤー賞に相応しく、研究科委員会の審議決定を経て、ここに推薦する。</p>
2	資格	イシイ ソウマ 石井 聡馬	社	1	太郎良ゼミナール	<p>本学生は、本学法学部法学科を2019年度に卒業し、その後、本学大学院に進学した学生である。大学在籍中に税理士試験科目の簿記論・財務諸表論に合格し、大学院進学後には消費税法にも合格した。税理士試験は、合格率10%前後の難関国家試験であり、在学中に3科目の合格が揃うという事は顕著な功績である。</p> <p>以後、大学院で修士論文を書き上げ、国税審議会の審査が通れば、晴れて税理士資格の基盤が整うことになる(税理士登録には2年間の実務経験を要する)。</p> <p>これは学部4年間と大学院2年間で税理士資格を取得できることを示した実績となり、本学学部生にとっても見本となる。これを成し遂げた本学生を、スチューデントオブザイヤー賞に強く推薦する。</p>

【スチューデント オブ ザ イヤー賞・大学】

No.	部門	フリガナ 氏名	学科	学年	所属	内 容
1	学術	タニザワ ハルナ 丹澤 春菜	法	4	勝亦 藤彦ゼミナール	<p>本学生は、「正当防衛における侵害の『急迫性』に関する判断基準について――最高裁判所平成29年4月26日決定を契機として――」と題する卒業論文を完成して提出した。本論文は、正当防衛状況に関する重要要件としての侵害の「急迫性」要件に関して、新たな判断基準を提示した最新の最高裁判例(最高裁平成29年決定)の意義について、周到かつ緻密に認定事実を解析した上で明らかにし、その判断基準を制度趣旨基準論と全体的評価説の両面にわたって批判的に分析した意欲的な論考である。</p> <p>本論文の特徴は、第一に、認定事実および判断資料に関して、オリジナルな観点から整理し、事実構造を段階的に緻密に解析を積み重ねた点にある。また、第二に、最高裁平成29年決定の意義を明らかにするため、いわゆる積極的加害意思と急迫性要件との関係を明らかにした最高裁昭和52年決定との対比を行い、かつ、自招侵害と正当防衛状況の関係について論じた最高裁平成20年決定との対比をも詳細に行った点にあり、本学生の判例対比の高い能力が明らかに示されている。第三に、正当防衛における急迫性要件とその他の要件との関係について理論的に分析を行い、要件相互の関係を考察しつつ、それぞれの判例の理論的な意義をも明らかにした点にある。さらに、第四に、本論文の周到な「注」にも表れているように、積極的に数多くの関連文献および判例評釈に関する周到な調査を行い、それらを熟読した上で、指導教官の指導をも段階的に踏まえた上で、きわめて丁寧な論述を行っており、専門的な文献の理解についても高いレベルに達しており、本論文には、本学生の高い勉学意欲と誠実な努力の証がきわめて明瞭に表れているといえる。</p> <p>以上の理由により、本論文は、大変に優秀な卒業論文であると思料し、ここに謹んで推薦するものである。</p>
2	学術	ミゾグチ キョウヘイ 溝口 恭平	政	4	外川 伸一ゼミナール	<p>卒業論文「人口減少時代における定住自立圏構想の可能性」につき、次の理由(3人の選定委員による)により、本学科最優秀卒業論文と銜賞された。</p> <p>(1)当該論文は、問題を分析し、適切なケーススタディを使用して日本社会の最大の問題の1つに対する解決策を提案するための良い努力である。全体として、本論文の問題意識、研究質問ともに明確であり、現状分析や問題点の抽出、論文の進め方など適切な学術研究ルールに比較的良く従っている。よって、本論文は、最優秀卒業論文に値すると判断できる。</p> <p>(2)当該論文は、問いの設定から結論に至るまで、明快に議論を展開している。また、論ずる際も、質的データと量的データとをバランスよく使い、説得力がある。社会が抱える身近で深刻な問題を真剣に捉え、有意義な提言をしていることも評価できる。</p> <p>(3)当該論文は、資料やデータを収集・整理するだけの調べの学習に終わることなく、渉猟した資料・データとの対話をとおして批判的に考察を展開できていると見受けられる。</p> <p>以上の理由により、茲に謹んで推薦いたします。</p>
3	学術	スズキ コウキ 杉木 光希	経	4	伊東 洋晃ゼミナール	<p>卒業論文「処分行動の動機に関する探索的研究」は、消費者の処分行動に着目した探索的研究である。研究の背景には、消費者がモノを手放す手段として、近年のフリマアプリ市場の拡大や新型コロナウイルス感染症の拡大があるが、消費者がどのような動機で処分を行うかという意識の変化に着目し、処分行動の動機を整理した研究である。</p> <p>消費者の処分行動の動機を明らかにすることにより、消費者の新たな購買への接続を知るうえでもビジネス社会に有意義な研究となりうる。また地球環境の持続可能性が重視される今日の消費社会のあり方を考えるうえでも、興味深い研究へと発展する可能性を含んでいる。</p> <p>以上の理由により、本論文は経営学部の最優秀論文として高く評価されたため、本賞に値する論文として推薦する。</p>

4	学術	ネツ根津 アヌミ 歩	管	4	針谷 夏代 ゼミナール	卒業論文「加熱調理後の食品重量から推定した栄養価とレシピから計算した栄養価および陰膳法による栄養価との比較 酸っぱいスープ～サムロー・モチュウ～」は、カンボジア農村部において、調査環境の整わない中で食事調査を行う際の基礎資料作成を目的に行われた研究である。現地をよく食されているサムロー・モチュウについて、データ取りのための調理を丁寧に行い、栄養価計算ではクメール料理独特の調味料を日本食品標準成分表に記載されている食品で代替するなどの工夫が見られた。まとめの項では、現地調査をする際の提言がまとめられており、研究目的を全うする内容であるとともに今後の国際貢献につながる成果である。
5	学術	アッシュリ ASHLEY サマー エリース Summer Elyse	国	4	Darren Ashmore ゼミナール 杉山 和孝 ゼミナール	本学生は、Language Arts及びPerforming Artsの2分野においてそれぞれ卒業論文を執筆した。 Language Arts分野の論文“A Soldier’s Journey Through Middle Earth: A Literary Analysis”はイギリス人作家J.R.R. Tolkien (1892-1973)の代表作、The Lord of the Rings三部作を、トラウマ理論を用いて考察したものである。本論文では、まず、第一次世界大戦を兵士として生き延びたTolkienの半生を振り返り、The Lord of the Ringsの作品内に彼の従軍の経験が様々なモチーフを通して反映されていることを指摘し、その後、主人公のFrodoが自らの旅を書き終えることで物語が終わる点に注目する。トラウマ理論において自らの経験を「書く」、つまり客体化することは、トラウマの経験を受容するために最も必要な行為の一つとして考えられていることから、Tolkien自身もまさにこの作品を「書いて」いる点に言及し、「書く」という行為を一つの救済と解釈する。本論文の優れた点は、テキストの研究から作者を排除する傾向が未だに強い現代の文学研究という文脈の中で、作者を研究対象に捉えつつ文化理論もバランスよく用いていることである。 Performing Arts分野の論文“Blessed Are the Forgetful: A Film Analysis”は、Christopher Nolan監督によるMemento(2000)と、Michel Gondry監督によるEternal Sunshine of the Spotless Mind(2004)の映画2作品を比較・考察したものである。本論文では、これら異なるジャンルの2作品において、新たなナレーション手法、非時系列的なプロット展開、および両監督の表現技法に着目し、両作品の共通項である「記憶の喪失」が、それらによって如何に表現されているかを分析している。また、これらの手法が視聴者の情報把握や意識の流れにどのよう影響しているかを認知心理学および映画・映像分析の視点から考察している点で、特に優れている。 両論文とも、多角的な学術的視点から問題を捉えるという本学部の理念に合致する優れた論文として、高く評価できる。
6	学術	ナミキ シズカ 並木 静香	ス	4	笠野 英弘 ゼミナール	本学生は、「スポーツ専門演習2」において学士論文「地域レベルの陸上競技大会における観戦動機」を執筆した。当該論文は、これまでのスポーツ観戦者研究の多くが人気の高いスポーツ観戦者を対象とした研究であった状況に対して、3大学の陸上部員へのアンケート調査及び観戦者へのインタビュー調査を通して、地域レベルの陸上競技大会に訪れるスポーツ観戦者の観戦動機を明らかにするとともに観戦者増加の方向性を示したものであり、研究の水準も極めて高いといえる。 スポーツ科学部では、本賞の推薦者を選考するため、学部長、副学部長、学年担任からなる選考委員会を立ち上げ、教員から推薦のあった対象者の卒業論文及び卒業論文発表会における発表スキルの評価を行った。その結果、人文社会系分野における研究では、並木静香さんが極めて高い評価を受け、推薦候補者として選出されるとともに、スポーツ科学部教授会においても承認された。 以上のことから、本賞(学術部門)に本学生を推薦する。
7	学術	サイトウ ソウタ 齊藤 颯大	ス	4	中垣 浩平 ゼミナール	本学生は、自身の取り組んでいる柔道競技の競技力向上に資する卒業研究を実施した。卒業論文では、本学柔道部の男子90 kg以下級選手を対象に、身体組成(除脂肪体重、体脂肪率)の測定を実施し、日本代表選手のデータとの比較を通して、本学柔道部のトレーニング課題を科学的かつ多角的に分析した。また、新型コロナウイルス感染症拡大に伴うトレーニングの中止が、身体組成に及ぼす影響を、トレーニング内容の変化とともに丁寧に考察した。また、本学生は積極的に海外文献(英語論文)を読み、身につけた知識を卒業論文に反映させていることも特筆すべき点である。 スポーツ科学部では、本賞の推薦者を選考するため、学部長、副学部長、学年担任からなる選考委員会を立ち上げ、教員から推薦のあった対象者の卒業論文及び卒業論文発表会における発表スキルの評価を行った。その結果、自然科学系分野における研究では、本学生が極めて高い評価を受け、推薦候補者として選出されるとともに、スポーツ科学部教授会においても承認された。 以上のことから、本学生を本賞(学術部門)に推薦する。
8	社会活動	イチカフ マイ 市川 舞	政	4	小笠原 祐司 ゼミナール	本学生は、会議や話し合いの際に議論の構造を絵や図などでビジュアルとして整理をする技術、グラフィックレコーディング(以下、グラレコと略す)を独自で学び深め、その学びを学内外に積極的に活用して貢献していた。 ①学内 1:講義内容をグラレコし、授業後に教員、学生に共有する学びのサポートを実施。 2:学生だけでなく、大学教員も交えた勉強会を開催。 ②学外 社会人が集う研修会や会議、ワークショップなどで、意見や議論の見える化を行い、社会人の学びの最大化のためのサポートを行う。事例は次の通りである。 1:山梨市役所主催の勉強会 2020年5月23日開催「財政が厳しいってどういうこと?オンライン対話会」テーマ:新型コロナウイルス対応と自治体財政への影響。 2:藤野で行われたテレワークを考えるためのワークショップ。 3:2020年11月20日のファンリレーション研修。 4:2021年2月6日 特定非営利活動法人大学コンソーシアムやまなし主催の「Why Cafe webinar 自分で生き方をデザインしよう」。その他、多数。 上記の貢献活動のほとんどは、本学生が積極的かつ主体的に活動をし、また、その活動を見た社会人から直接依頼を受ける等をして広げていったものである。こうした主体的な活動、また、学生や社会人の学びの最大化をサポートする活動は、本学の学生の社会的活動として高く評価できる。
9	社会活動	タケダ リョウヘイ 竹田 諒平	ス	4	三井 勇 ゼミナール	本学生は、学業及び学内外の教育活動に熱心に取り組む、学生の範となる生活を送った。特に学業においては、一般の教育課程(131単位)に加え、教職課程(28単位)を履修し、計159単位を修得見込みである。また、多くの科目を修得したにもかかわらず、GPAは3.54と、すべての科目において優秀な成績を得た。一方、学業以外においても、数多くの学内教育貢献活動を行っている。例えば、4年次にはキャリア形成のメンター、オープンキャンパスの学生スタッフなど学内活動に積極的に貢献した(別掲)。また、ゼミ活動である卒業研究においては、地元長野県大町市にある母校や地域振興を視野に、「中学・高校における登山教育の推進」を課題として意義深い研究を行った。このように、本学のエース格ともいえる数々の活躍は、名誉ある本賞にふさわしいものと認められるため、ここに推薦する。 (別掲) ○4年次 ・キャリア形成メンター(1年間) ・オープンキャンパス学生スタッフ 6~11月(3・4年次) ○資格取得 ・障がい者スポーツ指導員(初級) ・中学校・高等学校教員免許(保健体育) ○部活動 ・男子ソフトボール部キャプテン (参考) ○3年次 ・教育ボランティア(甲府南西中学校) 4~7月 ・野外実習(キャンプ)補助 8月 ・高大連携事業アカデミックガイダンス 学部代表 8月 ・障がい者スポーツ大会ボランティア 10月
10	スポーツ	アルメントイ ALMENTAY バクダウレット BAKDAULET	経	4	レスリング部	・内閣総理大臣杯全日本大学選手権大会 フリースタイル 125kg級 優勝 4連覇 (17.18.19.20) ・文部科学大臣杯全日本大学グレコローマン選手権大会 130kg級 優勝 3連覇 (18.19.20)
11	スポーツ	ヤマナ リナ 山名 里奈	ス	3	スケート部	・第31回全日本ショートトラック距離別選手権大会 1000m 3位 / 1500m 2位 ・第43回全日本ショートトラック選手権大会 500m 6位 / 1000m 優勝 / 1500m 優勝 / 3000m 2位 / 総合優勝
12	スポーツ	ノベヤマ トシカズ 延山 敏和	法	4	ラグビー部	・関東大学リーグ戦2部 2位(Aブロック1位)、1部入替戦出場決定 / コロナウィルスの影響により入替戦中止 ・第28回関東学生クラブラグビー選手権大会 優勝 ・第19回全国東西学生クラブ対抗試合 優勝(学生クラブ選手権 日本一)
13	スポーツ	ヒシグチ ダイチ 瀬戸口 大地	経	4	陸上競技部	・セイコーゴールデングランプリ陸上2020東京 男子800m 3位 ・天皇盃第 89 回日本学生陸上競技対校選手権大会 男子800m 2位 ※大会記録更新 ・第104回日本陸上競技選手権大会 男子800m 優勝

14	スポーツ	タナカ ヒカリ 田中 陽夏莉	ス	4	陸上競技部	・天皇賜盃第 89 回日本学生陸上競技対校選手権大会 女子100mハードル 3位 ・第99回 関東学生陸上競技対校選手権 女子100mハードル 7位
15	スポーツ	マツ イクミ 松 郁実	経	4	ホッケー部	・関東学生ホッケー秋季リーグ(女子1部)優勝(275連勝) / 最優秀選手賞 ・第42回女子全日本学生ホッケー選手権大会 準優勝 / 優秀選手賞 ・SAKURAジャパン日本女子代表候補選手
16	スポーツ	タカハシ ルリ 高橋 瑠璃	ス	2	柔道部	・講道館杯全日本柔道体重別選手権大会 78kg超級 3位
17	スポーツ	ヒラタ ミユキ 平田 美幸	ス	1	水泳部	・第62回日本選手権(25m)水泳競技大会 200mバタフライ 3位
18	スポーツ	シメズ カンタ 清水 寛太	政	4	硬式野球部	・関甲新学生野球連盟 秋季リーグ戦(1部リーグ) 5位 / 最多安打賞 ベストナイン賞
19	スポーツ	オオサワ ラアキ 大澤 来彩	ス	4	バスケットボール部	・第70回関東大学女子バスケットボールリーグ戦(1部リーグ)6位 / スティール王
20	スポーツ	フタ サナ 信田 沙南	法	4	ソフトボール部	・全国大学選抜ソフトボール選手権大会 関東地区予選会 代表権獲得 ・関東大学女子ソフトボール リーンフォースメント選手権大会(関東インカレ代替大会) 優勝
21	スポーツ	ヒラカワ ユウ 平河 悠	法	2	サッカー部	・第53回 東京都大学サッカーリーグ戦(1部リーグ) 山梨学院大学(ブレイブス)優勝、得点王 / 10得点
22	スポーツ	チバ ユキノ 千葉 雪乃	ス	4	ゴルフ部	・関東女子大学秋季Bブロック対抗戦 団体優勝(最優秀選手賞)

【スチューデント オブ ザ イヤー賞・短期大学】

No.	部門	氏名	科	学年	所属	内容
1	学術	ニイナ アサ 新名 亜美	専・保	2	山内 紀幸 ゼミナール	本学生を学術部門の模範的な学生として推薦する理由は以下の4点である。 1 彼女は、素直で明るく周りを笑顔にさせる豊かな人間性を有している。分らないことをそのままにせず、教師や仲間に素直に聞く姿勢がある。また、物事を多角的に眺めて問題点を発見し、解決のための具体的な提案をすることもできる。 2 彼女は、短期大学1年より小学校教員を目指し、熱心に学習を続けてきた。教育実習や現場研修(インターンシップ)、専攻科の教育実践を伴う多くの授業においても、情熱と使命感をもって取り組むことができていた。教職員からの信頼も厚く、オープンキャンパスでは、学生スタッフとして常に責任ある業務を任されてきた。 3 彼女の成績は4年間を通じて常にトップクラスであった。小学校教諭一種免許状に加え、幼稚園教諭、保育士資格、認定ベビーシッター、ピアヘルパーなど、教育・福祉に関係する幅広い資格をとってきた。専門的な知識の習得だけでなく、将来、授業実践を行う上での基本的な技能も身につけている。 4 彼女はどんな状況下にあっても向上心をもって主体的に物事に取り組んできた。新型コロナで自宅待機を余儀なくされる中でも、意欲的にテーマを見つけ、質の高い修士研究を行った。
2	社会活動	竹中 麻美子 ゼミナール 13名 (代表者) ジノグワシ 神宮寺 あみ	保	2	竹中 麻美子 ゼミナール	本ゼミナールの学生らは、1年次から国際交流活動に熱心に取り組む、コロナ禍で交流イベントの実施が難しい中、国際交流センターの協力のもと、密を避け、換気、消毒を徹底しながら、海外文化紹介イベント「クリスマス・トリップ」を実施した。この活動を、本賞に推薦する。海外との行き来が新型コロナウイルスの流行によりできなくなってしまった今、クリスマスという一つのテーマに絞って、様々な国の特色ある文化を、写真やPPTを使って紹介することにより、日本人や留学生など幅広い学生が各国の文化や特色の違いを知り、自国以外の国に興味を持つことができるよう工夫した。 コロナ禍であっても、「学生同士の交流を途絶えさせてはいけない」、「新型コロナウイルス感染予防を徹底しながら、今できることを工夫して行う」と考えてこの行事を企画、実施した学生たちの取り組みは高く評価できる。よって、本ゼミ生らを本賞(団体部門)に推薦する。
3	団体活動	パティシエ コース 2年生 (17名)	食	2	関戸 元恵 ゼミナール	本学のパティシエコースは菓子製造業の営業許可を有しており、学内外での販売に積極的に取り組んでいる。本年度後期のスイーツショップ実習では、学生や教職員を対象に洋菓子・製パン・和菓子の学内販売を行った。10月の洋菓子販売で多数の方に購入いただけなかった反省を活かし、12月の製パン販売では学生と教職員を対象とした2パターンの販売を展開した結果、従来よりも多くの方に購入いただける機会が提供できた。クリスマス恒例のシュトーレンの販売、学外では甲州天空かぼちゃ祭りでの販売も行い、学内外での販売は1,200個に及び、これまでの最多販売数であった。遠隔により授業を展開せざるを得ない本年度の状況下でも、学生一人一人が製菓技術の向上に努めながら、学生や教職員を和ませるひと時を提供し、「スイーツで人々を幸せに」を実現した。学生の活動が学内外に活気をもたらした、本学の認知度向上にも貢献した。
4	社会活動	モチヅキ 望月 みく タケザワ 瀧澤 拓磨	食	2	鈴木 耕太 ゼミナール	本学生両名は、「大学コンソーシアム山梨 学生イニシアティブ事業」において、「山梨の食(財)をもっと広げよう～山梨を食で盛り上げ隊～、NEW LIFE STYLE 2020」のテーマでの活動を企画し、同事業に採択された。また、山梨学院 生涯学習センター主催のワインセミナーや甲州天空カボチャ祭りにおいては、コロナ禍のもと、困難を乗り越え、山梨県産食材の融合、レシピ開発を新たな視点で実施した。同ワインセミナーにおいては、10種類の料理を、6月に15食、8月に15食、11月には12食を提供した。また、甲州天空カボチャ祭りにおいては、3種類の料理を114食提供した。さらに学食を運営しているエムサービス株式会社と連携し、交渉、メニュー開発、また試作などを重ね、「NEW LIFE STYLE 2020」に即した形式である、お弁当の形で食を提供する企画を立案した。山梨県産の食材を使用した和食弁当を57食販売し、世界的に食の支援を行っているTFTを通して、発展途上国への支援を行った。また、来る3月前半にも、国際交流センターのイベントにつき、お弁当の提供を実施予定である。 このように、両名は、今年度、一般的な活動の困難な状況下にも関わらず、本県を食で盛り上げようという明確な目的をもって、継続的にレシピ開発、提供を行い、社会的に大きく貢献した。 両名の学生としての資質は本賞にふさわしいと考えられることから、本賞(社会活動部門)に推薦する。